

【フリーペーパー】

有志舎の出版情報と歴史・歴史学

CROSS ROADS

VOL. 01

2019年7月1日

発刊にあたって

永滝 稔（有志舎代表取締役）

〈著者エッセイ①〉

比較思想史研究からみえてくるもの

趙 景 達（千葉大学教授）

〈著者エッセイ②〉

エリートも民衆も「主役」の近代インド史へ

志賀美和子（専修大学教授）

〈私が見た戦前の中国・台湾①〉

父の満鉄への就職

永滝 勇（有志舎取締役）



有限会社 有志舎



発刊にあたって

永滝 稔

歴史を学ぶ楽しさを、最新の歴史学の成果を、ぜひ皆さんにお伝えしたい。そして、歴史から学んだ「知」の力で世界から戦争を無くしたい。

その想いをもって14年前の2005年に有志舎は発足しました。

社員は現在、社長である私と経理担当である父・永滝勇の2人、それにアルバイト2名だけで、しかも編集・営業・宣伝といった基幹業務は私が一人でやっている実質「一人出版社」です。

本年から、学術書出版と並行して、弊社出版物の内容を著者ご自身にご紹介いただいたり、読み物を載せたPR小冊子『CROSS ROADS』を発行することに致しました。CROSS ROADSとは交差点・十字路のこと。歴史とは様々な人々が行き交い、出会うことで紡がれてきたものだという事から命名しました。

気軽に歴史と歴史学、そして有志舎の出版活動について知っていただければ幸いです。



比較思想史研究からみえてくるもの

趙 景 達

朱子学というのは、言うまでもなく修己治人の学であり、勉学して優れた人徳を磨き上げた者が優れた政治を行うことができると考える学問である。それは東アジア世界を席捲したが、日本の古学派はそれに懐疑的であった。丸山真男は、とりわけ徂徠学が政治と道徳を分離して政治の自律的領域を見出したとし、それを日本における近代的思惟の萌芽として高く評価した。丸山は、東アジアではひとり日本だけがそうした思想的営為をなしたとし、中国や朝鮮の思想を停滞的だと考えた。中国については戦後、これを自己批判したが、朝鮮については、中国の儒教思想が洪水のように氾濫してしまい、近代への独自の思想形成ができなかったと考え続けた。それに対して大陸から隔たっている日本は、中国の影響は雨漏りする程度だったので、独自の思想形成が可能であり、近代思想が萌芽することができたと確信していたのである。

これは朝鮮思想史研究にとって、大変やっかいな問題であった。思想史研究だけでなく、経済史研究でもとより朝鮮社会停滞論は自明のものとしてあった。戦後の朝鮮史研究は韓国・北朝鮮だけでなく日本でも停滞論の克服ということが大きな課題としてあった。その結果、1960～70年代には内在的發展ということが頻りに唱えられた。朝鮮も日本と同質的に近代化の方向に歴史發展していたという議論である。それは具体的には、資本主義萌芽の発見や富国強兵思想の発見などとして現れた。しかし、西欧のような資本主義萌芽を見出すことは、結局できなかった。それは日本史研究でも挫折したプロジェクトであった。

ところが、富国強兵思想については、現在に至るまで、朝鮮にも日本のようにそうした思想が出てくると考えるのが常識となっている。果たしてそうなのであろうか。私は思想

史研究においては、このことを明らかにすることに最大の問題関心を注いできたつもりである。その結果、朝鮮では富国強兵思想に代わって自強思想というものがあり、それは富国強兵とは似て非なるものであることを突き止めるに至った。自強とは、王政が民本主義的内政と儒教的教化によって充実しているならば、侵略を抑止できるとする防衛策であり、民本に反する軍事力の増強については防衛するに足る最小限度の軍事力を備えてさえいれは必要ないとする国家理念である。富国強兵を霸道とするのに対して自強は王道とされた。朝鮮では今日に至るまで自強を富国強兵と読み替えて理解するのが一般的であるが、私は、これは史料の誤読に基づくものであると考えている。仮に富国強兵とか富強という語が使われる場合であっても、それに含意される内容は正しく自強であったというのが、私の理解である。

日本思想史研究は、もとより丸山を先駆として西欧の基準に照らして日本思想史の普遍と特殊を明らかにしようとする動機に規定づけられてきたと言ってよいであろう。そして朝鮮思想史でもまた、そうした方法による研究が今日に至るまで行われ続けている。脱亜的な問題意識はひとり日本史だけでなく朝鮮史でも同様である。しかし本来最も比較されるべきは、隣国同士の間であってしかるべきはずである。同じく儒教的文化圏に属しながらも、日本と朝鮮は国家や社会のあり方が構造的に違っている。日本では、朱子学が正統とみなされるようになるのは、1790年の寛政異学の禁まで待たなければならないが、朱子学化が遅れたのは、何よりも国家や社会の構造が中国や朝鮮と違っていたことが大きいのだと思われる。

本来儒教では、孝は忠より優先される道徳概念であるが、近世日本では忠の方が孝より

優先されていた。それは、準戦時体制的な幕藩制国家にあって、俸禄をはむ武士の家の存続は主君の家の存続によってこそ担保されていたからであろう。朝鮮ではあり得ないような赤穂浪士の美談が誕生した所以である。家のあり方は農工商などの身分においても朝鮮とはだいぶ違っており、異性養子を当為と考える日本では、家というのは祖先を同じくする血縁共同体では必ずしもなかった。しかもそれらの身分もまた、それぞれ軍役を担わされており、その職分維持はある種の社会性を帯びていた。それに対して異性養子を原則認めない朝鮮では、孝は絶対的である。しかも、支配身分たる両班は地主として経済的基盤があるがゆえに、その家門は李王家が絶えようとも存続しうるものであった。本来個人道徳から出発した儒教は、国家の存在を超えた普遍的な道徳観念を持つものである。私は公によって絶対的に規定されない領域であった。

それゆえに、日本の国体思想など朝鮮では生まれるべくもない。さらに、儒教には死生観（魂魄論）にまつわる宗教性も備わっていたが、宗教的に冠婚葬祭の礼式を定めた『文公家礼』が行われた朝鮮と、それが行われなかった日本とでは、儒教観そのものも相当に違う。

今日、日本と朝鮮半島にある二国の間は、少なくとも国家外交的には険悪な状況にある。これには歴史的背景が最も重要な因子として原因しているのはもちろんだが、両民族が思想史的に背負った思惟のあり方もまた重要であるというのが私の見立てである。両者間には国家観や社会観、民衆意識などにおいて様々な違いがあるが、それらの深層にある問題は個人レベルではもちろん、学問レベルでも分かり合えてはいない。儒教的伝統をどこかで継承していながらも、違った相貌をみせる両者の比較思想史研究は、今後益々重要なテーマになっていくに違いない。

Information



『朝鮮の近代思想—日本との比較—』

趙景達 著

A5判、ハードカバー

470ページ

定価（本体8,000円＋税）

ISBN978-4-908672-30-9

エリートも民衆も「主役」の近代インド史へ

志賀美和子

インド近代史というと想起されるのは、非暴力主義を掲げてインドを独立に導いたガンディーや、冷戦体制が構築されるなか非同盟諸国の旗手として新生インドを指導した初代首相ネルーあたりが定番であろう。彼らは全インドレベル、国際レベルの政治の表舞台でスポットライトを浴びた文字通りの立役者である。しかし当然のことながら、その舞台には多くの脇役や裏方が存在した。さらには観客もただ受動的に舞台を眺めていたのではなく、己の感想や意見を叫び時に舞台に躍り出てインド独立という劇の進行に影響を与えた。本書が描くのは、劇場空間を共有した人びと全てを主役とするインド近代史である。

19世紀に胎動した、イギリスのインド統治のあり方への異議申し立てとしての民族運動は、植民地支配の末端を担う都市部エリートが主な担い手であった。彼らの活動は概ねインド人の政治的・経済的権限の拡大を求めて植民地政府に陳情するというもので、民衆の不满や要求とは連動していなかった。しかしこのような運動を「政治的物乞い」と批判して独立を志向し、その実現のために大衆を動員しようとする動きが現れた。ここにイギリス領インドに居住する人びとを「インド民族／国民」として統合しようとする民族主義が生成したのである。

ガンディーは、団結した民衆のエネルギーを注視し、インド社会内部の全てのコミュニティの融和を通じた国民統合を目指した。しかし、この融和を重視する姿勢が高じて、インド社会内部の階級闘争に発展する恐れがある農民運動や労働運動を実質的に抑止した。また、ガンディーの深層心理に潜むヒンドゥー教的、バラモンの価値観（バラモンはヒンドゥー教の身分制度であるカースト制度の最高位を占める）が国民統合を支える諸理念に滲み出ていたことが、少なからぬ人びとの反

発を招いた。反感がとりわけ強かったのが本書の舞台、南インドである。同地域では19世紀後半から、宗教的にも政治的にも圧倒的優位を誇っていたバラモンに対抗する非バラモン運動が高揚していたために、カースト制度を擁護するガンディーに異議を唱えた。非バラモン運動は、次第に労働運動への関心を強め共産主義と結びついて、民族運動の展開に変質を迫ることになる。

民族運動、非バラモン運動、共産主義運動はいずれも民衆との結びつきを志向したが、運動を主導する立役者、すなわちエリートたちがいかに高邁な理想を掲げようとも、それが民衆のその時々々の要求や感性に合致しなければ、民衆は一方的に動員されようとはしなかった。むしろ民衆は、様々な勢力が競合して自分たちに接触してくる状況を活用し、自分達の要求を実現するよう彼らと交渉するようになっていく。

1980年代初頭、サバルタン研究グループの一連の成果によって、民衆をカリスマ的指導者や有力者に動員される客体として等閑視する従来の歴史認識は根本から覆された。同グループは、サバルタンを、エリートとは異なる価値観を有し自律的に行動する主体と仮定した。その結果、従来は無計画で突発的な感情の発露とされてきた農民反乱や部族反乱が、サバルタン独自の価値観と規範に基づく行動であったと評価されるに至った。同時に、エリート主導の運動もサバルタンの規範に合致しなければ動員に失敗したという事例が掘り起こされた。しかし初期サバルタン研究は、サバルタンとエリートを実体とみなす本質論的傾向があり、主に二つの問題を含んでいた。第一は、サバルタンとエリートの接触と交渉による双方の意識や行動の変化、さらには両範疇の溶解が想定されていないことである。第二は、サバルタンの自律性の顕現

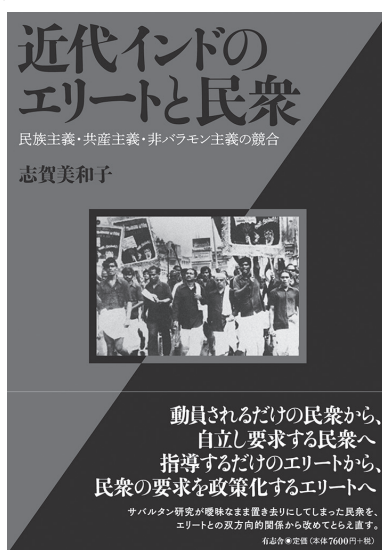
の典型例とされる単発的反乱や短期的運動ばかりが分析対象となり、かえってインド近代史におけるサバルタンの役割が曖昧になっていることである。第一の問題については、80年代後半ごろからサバルタンとエリートに関係性の中で分析する試みが始まり、サバルタンは様々な権力関係や状況に応じて現れる性質として捉えられるようになった。しかしその後、サバルタン研究はエリートの言説分析に重点を移し、サバルタンの存在は結局インド近代史における位置づけが曖昧なまま取り残されてしまっている。

本書は、従属性を含意するサバルタンという用語を使用せず、敢えて主体としての「エリート」と「民衆」という範疇を設定し、エリートと民衆が相互に影響を与え双方の認識や行動様式を不断に変化させていくさまを描

いている。また「エリート」と「民衆」は相互排他的で固定的な範疇ではなく、長い接触と交渉の過程を通じて流動する可変的な関係性であることの立証を試みている。

なお、本書のカバーには赤と黒の二色が使われている。赤は共産主義運動、黒は非バラモン運動と表裏一体の関係にあるドラヴィダ運動のシンボルカラーである。南インドのタミルナードゥ州では、二大地域政党のドラヴィダ進歩連盟と全インド・アンナドラヴィダ進歩連盟を筆頭とする多くの政党が赤と黒の二色を党旗に採用している。在地で民衆の意を汲み民衆と相互に影響を与えつつインド全体の政治社会動向に異議を申し立ててきたという地方エリートの自負が各地域政党の赤黒二色旗に表れているのである。

Information



『近代インドのエリートと民衆—民族主義・共産主義・非バラモン主義の競合—』

志賀美和子 著

A5 判、ハードカバー

370 ページ

定価（本体 7,600 円＋税）

ISBN978-4-908672-26-2



父の満鉄への就職

永滝 勇

私・永滝勇は、有志舎社長の父であり、同社の取締役（経理担当）である。今年 86 歳になる老人であるが、少年の頃、つまり 1937 年（昭和 12 年）から 1945 年（昭和 20 年）まで、転々と勤め先を変える父親に連れられ、たまたま満州・華北・台湾といった「外地」を目にするという貴重な体験をすることができた。

ここでは、その私が見た「外地」の姿とそこで出会った人々について書いていきたい。今では歴史資料のなかでしか知ることの出来なくなった世界を、少しでも語り残しておければと思った次第である。

さて、私が生まれたのは、現在の東京都江東区平井の線路脇、傍らをメタンガスがボコボコと泡立たせながら流れていく真っ黒なドブ川にかかった小さな橋を渡ったところにある長屋風のしもたやの一角である。1933 年（昭和 8 年）9 月 3 日、斉藤家の七男として生をうけた私は、生まれて程なく、親戚で子供の無かった永滝家の養子となる。養父は永滝安太郎、養母はフサといった。ちなみに私が養子であることは成年になって初めて知った。

安太郎は栃木の宇都宮の出で、私が物心ついた頃は横浜で市電の車掌をしていたが、実によく職を変える人であった。車掌の前はラジオ屋の店主で、さらに通信講習所にも通って電信技術も身につけていた。当時、満蒙の開発が世論を高揚させていた時代で日本内地からは満州へ満州へと、人々は繰り出していた。

そうした中であって父・安太郎は、華やかさを誇っていた南満州鉄道（満鉄）と関東軍

事務員の両方の試験に合格し、贅沢な迷いの中で満鉄を選び、その無線技師として満州の大連に赴任して行くことになったのである。父が渡満したのは奇しくも盧溝橋事件が勃発した 1937 年の夏であった。

数ヵ月後、父の後を追うようにして母と私は生まれて初めて日本を離れ汽船で大連へと向かった。と書いたものの、当時 4 歳だった私には、その時の記憶は殆ど無く、大連港に入港した時、すごく賑やかで遊園地の入り口みたいと感じた位だろうか。そして、自宅となる満鉄の官舎まで行ったのだが、全く同じ形をした平屋建ての家がズラリと並んでいて、その一つが我が住まいであった。日本と違っていたのは赤レンガで出来ているのと、それぞれに小さな物置小屋がついている事で、この物置には石炭が山ほど積まれている。それだけ冬の寒さが半端でないという事だった。部屋は六畳二間くらいだったと思う。（続く）

© 有限会社 有志舎

〒166-0003 東京都杉並区高円寺南 4-19-2、クラブハウスビル 1 階

TEL 03-5929-7350

FAX 03-5929-7352

mail : yushisha2005@gmail.com

URL : <https://yushisha.webnode.jp>

無 料
(禁転載)